

# Newsletter

NOVEMBER 2001

http://www.aack.or.jp

## 目次

● お知らせ	1
● 特集	
・ A1 AAACKの登山哲学とは？	川瀬裕史……………4
・ A2 慌てたらアカンデー	岩坪五郎……………6
・ A3 ここまでできたAAACK	高村泰樹……………7
● 紀行文	
・ 未知の山を求めて	平井一正……………9
● 新刊書紹介	
・ 登山の医学ハンドブック	松林公蔵……………15
● 報告	
・ 映画史『ヒマラヤへの道』製作にあたり	平井一正……………16
● 甲意	
・ 一澤オヤジの思い出	北村泰一……………17
● 会員動向	……………19
● 訃報	……………19
● 旅行案内	
・ グリーンランドへの旅	北村泰一……………20
● 編集後記	北村泰一……………20

## ● お知らせ！ ●

これから二年間のAAACKニュースレターの編集を、北村 泰一（昭和二十九年理卒）、上田 豊（昭和四十二年理卒）、松林 公蔵（昭和五十二年医卒）の三名が行います。二十二号（二〇〇一年十一月）二十九号（二〇〇三年七月）までの八回を担当します。接触は、ご都合のよい編集子をお選び下さい（文末に連絡番号など記載）。

## 【特集と公募】

この二年間、以下のタイトルで特集を組みます。

『パイオニア・ワークII初登頂主義・初踏査主義は欠陥思想か？』、副題、『AAACKのこれから歩むべき道』

ただし、掲載された意見に、皆さんの反論、異見がある場合もあるでしょう。これらも掲載し、誌上討論の形をとりたいと思います。また、賛成論も載せたいと思います。

後の便利の為に、右記のタイトルの皆さんの意見をA、それに対する皆さんの反論なり意見をBとしますと、始めの四回は（一年間）Aのみを掲載し、次の二回（半年間）は、

Aと既掲載のAに対するBを混じえて掲載し、最期の二回はBのみを掲載する予定です。

一部の方には原稿（A）を依頼しましたが、一般の投稿原稿をも募集します。掲載にあたっては、依頼、応募を区別しません。皆さん、かねてあためていることをご披露ください。あて先は、文末のもよりの編集子をご利用ください。

ご投稿には、手書き、ワープロ手書き（郵送またはファクス）でも結構ですが、Eメール（ワード二〇〇〇）がベスト、でなければテキスト形式）なら、なお便利です。

掲載論文には、論文番号十著者名を付けます。それをその論文のIDといたします。後の議論で必要な時にはご利用下さい。

## 【特集の主旨】

この二年間、『AAACKの初登頂主義・初踏査主義は欠陥思想か？』（副題『AAACKのこれからすすむべき道』）という問題を追求します。遅すぎますが、とにかくやってみます。

『欠陥か？』という意味は、次のような意味です。

われわれは、京大山岳部、AAACK時代を通して、『パイオニア・ワークII初登頂主義』の登山哲学に心酔し、その実現を目指して努力して

参りました。

A A C K の活動当初から（五十年前、一九五〇年代）、未踏峰がなくなったらどうするか、との不安はありました。当時、最高峰のエベレストこそ一九五二年に登られました。が、それ以下の未踏の巨峰も多くあり、また、南極、中央アジアなど、多くの『パイオニア・ワーク』を実践する地域がありました。

敗戦後、われわれが外国に出ることは不可能に近かった世相も、一九五〇年代は、理屈をつければ（『學術』とか、『現地とのジョイント』とか）、外国へ出ることが可能となり始めた頃で、A A C K も活動を開始したころでした。

その当時、我々は『初登頂主義、初踏査主義』を実践するのがせいぜいで、未来の、『未登峰がなくなったらどうしよう』とか『地上に未踏地がなくなったらどうしよう』とかを考える余地はありませんでした。

時は経ち、かつての『餓狼』（むさぼるように初登頂主義を実践した人達。6頁の岩坪五郎氏の論文参照）は、いまや『穏やかな獅子』と化しました。めぼしい未踏峰や未踏の地が地上から姿を消して久しい時間が過ぎました。

また、世間一般に『初登頂主義』を標榜する山岳会が満ちあふれ、ヒマラヤ地域はかつての日本アルプスと大差がないほどポピュラー化し、『ヒマラヤ』を踏まぬ人間は岳人にあらず、との風潮さえ感じられるこの頃となりました。ヒマラヤ・トレッキングと称して、かつてポーター、シェルパとともに歩んだ道

は運動靴で闊歩できる時代となりました。

『パイオニア・ワーク』は、フリークライミングや、より困難なルートへの追求へ、と変貌してまいりました。

これは、大正から昭和初期にかけて、日本の登山留学生が持ち帰ったヨーロッパのスポーツ・アルピニズムが、その頃の日本登山界を牛耳ったあの風潮に似ています。

われらの事実上の初代（今西、西堀、桑原氏など）が、『初登頂主義』の登山哲学を唱えだしたのは、その頃です。世を風靡する『スポーツ・アルピニズム』に飽き足りなかつたのかも知れません。

時は繰り返す。初登頂主義が行き詰まっている今日、若者の情熱は、かつて『餓狼』が追求した『知的情熱』から、『技術的、スポーツ的情熱』へと変貌してまいりました。

註・『知的情熱』は初登頂主義、初踏査主義への情熱に通じる。『知的』とは、その行為が、人知を開く、といった時に主として用いられる。

『技術的、スポーツ的情熱』は頂上は踏まれているが、そこに至る未踏のルート、登攀困難な岩壁を征服しようとする情熱。冒険的情熱に通じる。

ここにいたって、われわれは五十年前と同じ登山哲学を繰り返しても良いのか、と反省します。五十年前の田園的登山哲学『パイオニア・ワーク』は初登頂、初踏査主義を、なお唱え続けていて良いのか、との疑問を持ちます。

餓狼達が信じて疑わなかつた『未登頂主義』

『未踏査主義』は、未登頂、未踏査領域の無くなった今日、どうすべきか、ということは何も教えてくれません。いうなれば、それは『絶対思想』ではなく、『時間限定思想』と言えます。

一部の人は、今日あることを予想して、警鐘をならしていましたが、それを『絶対思想』だといひ信じこんでいた餓狼たちに責任があるのかもしれない。『……は欠陥思想か？』という言葉はそういう意味です。

が、果たしてそうでしょうか？私（北村）はそうは思いません。

歴史をくり返すと、仏教でもキリスト教でもイスラム教でも、教義そのものは正しいと思われまふ。ただ、その解釈が、しばしば誤ることが多いのです。オウム教でさえ、そう思われまふ。

そこまで考えずとも、我々の『初登頂主義』『初踏査主義』は、やがて行き詰まる、或いは、行き詰まって久しいという思いは誰もが抱いていたことと思います。しかし、これという決定的な考えを思いつかぬまま、つい、ダラダラと時を過ごしてしまつた、というのが実情ではないでしょうか。

そこで、この機会に、この難問で気の重い問題をA A C K 会員全員の公議に問うて、その決定版を見出したいと希求する次第です。

諸々の議論は、貴方の意見が公にされてから始まります。会員の中には、登山は個人的な色彩が濃い。だから、組織（A A C K）は、『自分の登山』に利用できれば良いのだ、だから、組織が登山哲学を持たなくても良いの

だ、という考えの方もおられると思います。しかし私（北村）は、やはり組織は哲学を持たねばならない、と思います。そうでないなら、個人が利用するにも出来ないではありませんか。

このニュース・レターは、掲載された一つの意見（A）に対する批判、賛意などの意見（B）も受付け、適当な号に、その質問なり意見と、筆者の答を同時に掲載したいと思えます。いろいろな人がいろいろな意見を公にし、それについて議論し、可能ならばその議論が収束すればよいと願っています。そして、出来れば、その意見が『夢多い意見』で、今後の我々の指針になることを願っています。ご投稿の際は、下記のタイムスケジュールをご承知ください。

ニュース・レターは年四回（二月、五月、八月、十一月）に発行いたします。投稿原稿は、各発行月の二ヶ月まえに私の手許に届く必要があります。一ヶ月まえには印刷所に送らねばならないからです。私の手許にある一ヶ月の間に、著者とやりとりをします。

どうか、どしどし意見をお述べください。書くことを厭われるムキには、私が文章化します。録音テープにでも、意見を吹きこむかあるいは、メールを通して意見の大略をお寄せ下さい。完成するまで、私（北村）が著者とやりとりします。どうか、文末の三人の編集者のいずれかへ連絡下さい。

## 新編集方針

右記の特集記事の他に、今期の編集は次の

項目に重点をおきます。ふるって投稿ください。

今まで、原稿のままに放つてあるものとか、まとめる前の段階の原稿とか、を、手入れして陽の目を見させてください。

また、適当な人を推薦ください。こういう話がある。これは〇〇氏が適当である、というふうには。あとは、編集者がやります（推薦人は普通は明らかにしません）。

●（言いたい放題（AACKの将来とダブルところがある））

AACKに対する意見、批判、希望など何でも歓迎。必要あれば匿名も可。匿名の秘密は守ります。

●（あの日、あの時、あの一言）

遠征のコボレ話を残しておきたいと思えます。正式報告はそれぞれの出版で知ることができます。

一つの遠征が成立するときには、ある人の信じられないくらいの情熱、努力が注がれるものです。つまり、『飢狼』が必ず現れるものです。

しかし、そうした情熱や努力は、公式報告書からは知ることができません。あなたがシニアなら、『餓狼』でありし日の思い出として、貴方がジュニアなら、忘れないうちに、それらを活字にすることを考えてください。そして、その情熱と気迫は、きつと違う世代に伝わるものと思えます。

●（紀行文）

会員の皆さんが、外国のワイルドなところ（なるべく人跡まれなところ）を訪れた紀行文を募集します。

AACK会員は、高きを追求する人達（垂直組）ばかりではありません。アマゾンやサハラ砂漠や極地のようなところにも足跡を残す人達もいます（水平組）。チベットや、中国の奥、中国の未開放地域、中央アジアの地域などの紀行文などは大歓迎です。

日本の山の紀行文も受け付けます。年とつてからの山行記録とか、何かそこに新しい情報があれば、いうことはありません。

尚、原稿に出てくる地名がのっている地図を必ず添付下さい。

●（探検登山講座）

（一）登山（史）の謎

登山にいろいろな謎があるでしょう。最近マロリーの遺体が出てきました。そのほかに、いろいろな登山から謎があるでしょう。今は『穏やかな獅子』となった人達が、今までに追求したであろう、そして蓄積したであろうこれらの話題の投稿を待ちます。

（二）探検（史）の謎

登山以外の探検の謎について、会員が勉強したところを披露ください。

・極地探検

私（北村）がいくつか埋めますが、AACK会員で極域に出かけた人達が優勢です。そうした人達、一般の会員の投稿を期待しています。

・世界探検（中央アジアその他）

中央アジアのみならず、世界の未開地へ出かけた人も多く（紀行文は右記へ）、それらの地域に関心を持った人達も多いでしょう。勉強したところをご披露下さい。

（三）登山科学物語（アホシリーズ）

『アホシリーズ』と銘うって、難しいとされる科学を物語風に専門外の人にも判りやすいように解説します。難しいことを判り易く表現することは、なみ大抵なことではありません。それぞれの専門家はその心積もりをしておいて下さい。私（北村）もお手伝いいたします。

- ・アホでもわかる山の地質物語
- ・アホでもわかる山の気象物語
- ・アホでもわかる山の雪水物語
- ・アホでもわかる山の医学物語

●〔探検登山随筆と評論〕

探検登山に関する随筆や評論も募集します。AACK会員の中には、常々書き溜めている随筆原稿などがある、または、常々考えているいろいろなことがあるでしょう。これをこの際、活字にしてみませんか？このニュース・レターは、一般雑誌または単行本への公表の前段階と考えてくださって結構です。そう考えれば、頭の中にあるアイデアをこのニュース・レターに活字にして整理してみるのも一方法でしょう。投稿をお待ちしております。

自らが参加した、あるいは他隊の探検行、登山行の論評も掲載します。批判を含んでい

ても良いし、称賛を表しても結構です。探検行、登山行は現在のものでよいし、歴史的な隊のことでも結構です。

●〔世界の探検・登山情報〕

日本で企画されている、あるいは企画された探検行、登山行は勿論、世界のどこかで計画されている探検、登山情報を知るために設けました。この目的に相応しい記者を募集します。自薦他薦を下さい。

●〔会員の動向〕

会員の住所変更、勤務先変更、連絡先変更、逝去通知など、なんでも結構です。ご自分で連絡していただくほかに、ご存知の方のご一報を待ちます。

これは吹田啓一郎氏が引きうけてくださいました。氏の勤務先も変わりましたので、文末を参照下さい。

●〔人物紹介〕

自薦他薦の原稿をお待ちします。ふるってご投稿下さい。

●〔新刊情報〕

探検・登山に関する新刊図書を紹介。

●〔その他〕

上記のカテゴリに入らない文、何でもOKです。ふるってご投稿下さい。

投稿などの場合は左記のいずれかへ。

## A1 AACKの登山哲学とは

川瀬 裕史

僕は、AACKの哲学は、もともと、Pioneer Workにあったと思っています。Academic Alpine Club of Kyoto と言っているが、本当はAcademic Pioneering Club of Kyotoなのです。

登山において、Pioneeringとは、未踏峰を目標とすることであり、未踏地をめざすこと

であったのは当然です。

しかし、けっして、未踏峰、未踏地だけやありません。

このPioneeringというのは知的冒険と言う意味です。[Academic]とあたまがついて

いる。  
学問におけるTerra Nova (新天地)、Terra Incognita (未知の大地)は言うにおよばず、ビジネスの分野でも、芸術でも、あらゆる分野でPioneering Workをやるのです。未踏峰を極めることを、笹谷べべ(哲也)氏が「昇天経験」と表現していました。

うまいこと言うもんです。アノ瞬間の時の気持ちです。おわかりでしょう？

平井ポコ(一正)氏などは多くの昇天経験を持っている一人でしょう。

昇天経験者は、山登りとして、神々にめでられし至福の人と言ってよい。

学問の世界でも、ビジネスや芸術、スポーツの世界でも、時代に先駆けて「やった」という快感は昇天経験と同じでしょう。

Pioneerはもとよりアメリカの西部開拓民のことです。

アメリカは月にもいった。

Excelsior! (より高く) などと言う言葉もある。これは、世界貿易センターのあったニューヨーク州の標語でもある。

近代的な意味で、はじめて山を「そこにある」という理由だけで登ったのは、十四世紀のペトラルカだと言う。彼が始めたという、山登りは、ギリシャ古典時代には無かったのだから、それは再生でも復興でも

ありはしない。

ペトラルカはルネッサンスの中心人物の一人ですが、彼の山登りは、ルネッサンスという言葉の持つ、復興とか再生と言うことではない。それは、創造的行動であり、古典ギリシャや中世からの飛躍だった。

彼においては、「より高く」とは未だ関係なく、「山登り」そのものが、Terra Novaへの知的飛躍だったと言える。

A A C KのPioneeringや、Alpineという名は付いていても、ペトラルカ的な意味での、多方向への知的飛躍だった。

A A C Kは、日本文化の源流をたずねるQuestにも惹かれ、山登りを焦点とし、さらにそれにかこつけて、ユーラシア大陸を日本から西へ、シルクロードを、ヒマラヤへ、カラコルムへ。谷泰氏などはさらに遊牧というテーマを追って、イタリヤまで行きよった。

A A C Kのスポーツとしての登山活動は、本来登山活動だけが目的だったのかどうか疑問だった。

そういうグループだったのではありますまいか？

阪本グド(公一)氏などに言わすれば、A A C KのなにかAlpineですか、山も登らん

くせに、と手厳しかった。

そうやない。たまたまいろんな分野の知的冒険のすきな仲間の趣味が、期せずして山登りをやったというにすぎない。

山は「だし」や。山にかこつけて、自由な発想や討論をし、知的探求をしとったんや。そう考えたら、いかにA A C Kが「山

を登らんクラブ」やとしても、腹は立つまいと、いつか言ったことがある。

広瀬エト(幸治)氏も、その通りや、と言ってくれていたと記憶する。

僕も今から未踏峰、というのはちよつと無理です。

しかし、知的Terra Incognitaへの冒険は死ぬまで続けていきたい。

それがA A C Kの本来の「さが」ではありますまいか。

もつとも、あらゆる分野の知的冒険が目

的やったんやとなると、「A A C K」というグループアイデンティティがなくなる。

A A C Kの目的は、山は「だし」で、本来は知的冒険や。しかし、山の好きなやつで仲間をつくる。ということでしょうか。

登山というスポーツは、大競技場で、走ったり、飛んだり、投げたりして、大観衆のどよめく大喝采を浴びるスポーツではない。未踏峰の数は有限だから、いつかお終いになる。

いまやてっぺんはTerra Novaでなくとも、そこに至るアプローチやプロセスを新しく

選択することが意味あることのようになっている。

アプローチやプロセスが多様であれば登山の評価は判り難くなるし、社会的意義も薄れてこざるを得ない。そうゆうものは、いずれば博物館と趣味の領域に落ち着くことになる。

山登りはスポーツであり、一つの文化です。文化とは、「これが好きや」とでもい

べきものです。

僕に言わずれば、物質文明とは、「これは便利や」というもので、制度文明は、「これがきまりや」というものです。

「これが好きや」というのは「このろざし」とも「偏見」とも言えます。主観的なものといつてよいでしょう。

なぜ「このろざし」であり、「偏見」であるというのか？それは「このろざし」だけやと「ひとりよがり」になるかもしれないからです。共通の「このろざし」、共通の「偏見」を愛し、かつ分かち合うことこそ、人生の美である。

これは決してセンチメンタリズムではない。不毛ではない。

山登りが、知的冒険、知的挑戦への創造の場を、仲間とともに語り合う共通の場を与えてくれた。

未踏峰が有限でも、Pioneering Workは、今も、将来も変わりなく続く。(了)

編集長、北村タイシン(泰二)氏から、ちよつと哲学的で説明不足やと、クレームがついている。

今回のものは、A A C Kの登山哲学についてのものです。

一般に登山哲学そのものがテーマになりうると、僕は以前から思っている。いつかそのうちに、それについて書き、編集長のOKがあれば、クレームに答えたいと思っている。

### 【著者短介】

川瀬裕史 別名マタサブ。一九五六年法卒。リコー・コーポレーション勤務。一九八〇年

渡米。一九九九年退職。現在も在米。知床岳冬季初登頂(一九五三)時のサブリーダー。(二〇〇一年十月十六日受理)

## A2 今あせて無理したらあかんで

岩坪 五郎

一九六〇年代後半、全共闘運動という嵐が全国の、いや世界中の大学を吹き抜けた。日本での発信源であった東大全共闘のスローガンは「〈連帯〉を求めて〈孤立〉をおそれず」であった。

自分たちが正しいと信じる道を自分たちは突き進む。それに共感し、応じてくれる人たちがいればいいと思う、うれしい。いっしょにやろう。しかし、そのような人がいないからといって、少ないからといって、仲間を多くするために、方針ややり方を変えようとは思わない、と私は解釈している。

当時の大学の学生運動の多くは既存の左翼政党・団体に指導されていたし、また、ある程度学生の集団が強くなってくると、彼らはその運動を自分のものに吸収しようとしてきた。既存の政党・団体は自分の組織を強く、大きくしようとするのに対して、全共闘はそれを拒否したのである。その点でも全共闘運動は一種の文化運動の性格をもっていて、これにすばやく注目した朝日新聞はその機関誌かとうわさされる雑誌を発行していた。

このスローガンを当時の世間はまことに新鮮なものとうけとったが、私は、これはA A

C Kと同じではないかと思った。私の解釈では、A A C Kはヒマラヤ初登頂を実行するための運動体(戦闘集団)である。もちろん登頂隊だけではなく、主計部も情報部も、さらにそれを支援する人たちをも擁する大部隊となることもある。今西(錦)氏の言を借りれば、役にたつもんはなんでも使え、来る者は拒まず、去る者は追わず、である。

しかしこの運動体の主力はあくまで登攀、登頂隊員である。以前のことはよく知らないが、チヨゴリザ隊成立の主力はアンナプルナ帰りの脇坂(誠)氏であり、その後勤部隊の山口(克)氏であった。ノシヤックは、酒井(敏明)氏の執念、サルトロカンは四手井(綱彦)、高村(泰雄)氏の執念であった。サルトロカンのあとしばらく空白が続いたとき、A A C K時報に、今、A A C Kには餓狼がいなくなってしまう。彼らが再び空腹になるか、若い餓狼が参加してくれるのを待たねばなるまいと私は書いた。

この後、樋口(明生)、松田(隆)氏らの執念により、マナスルより高いヤルンカン初登頂が実現して、ついに今西氏らのA A C K創設の目的はとげられた。また、ナムナニの成功は、辺境を目指すパイオニアの夢を実現した。

運動体(戦闘集団)にとつて最大の問題は、前述、餓狼の出現の減少である。それは、ナムナニ偵察隊の隊員の募集で困却したときから始まっている。北京大学が山岳部を創設し、どこへでもよい、京都大学山岳部と合同登山隊を組織したいと言ってきたとき、ついに成

立しなかったという例がある。

私など、ヒマラヤ初登頂ができるなら、二三年落第すること、場合によっては放校されることもいとわなかった。ただ、桑原（武夫）、近藤（良夫）氏らからそれで資金はどうするつもりや、といわれて押し黙らざるをえなかった。今、後勤部・主計部の能力は大きく発展している。しかし、前線部隊なくして何ができようか。

前線部隊のいなくなつた理由は簡単である。適当な、心を揺する対象がなくなつた。極地の横断や最高峰の登頂は個人でいくらでもなされている。マスコミの評価をうけられない、などである。マスコミの影響は現実の問題として大きい。人が集まるためには、マスコミと女性の動向は戦闘集団の行動に決定的である。

それではどうするか提案しなければならぬ。

それが「AACKの将来」の特集号を企画した編集子の要求である。しかし私に言わすれば、戦闘集団の行動の特徴は、その機密性、奇襲性にある。歌つて踊つて、百花斉放、百家争鳴はなじまないのではなからうか。

今、あせつて無理したらあかんぞ！これがこれまでAACKに迷惑をかけてきた私の提案である。

家貧にして孝子が、国乱れて忠臣がでるといわれている。時を待ていよう。場合によつてはそのまま消滅するかも知れない。それでもよいではないか。

元が滅びたとき、蒙古族は馬に乗り、北の

草原に向かつて一斉に大都を去つたという。その時期をもう少し待とうではないか。来年くらい餓狼が出現するかも知れない。

京大博物館のAACK関係の資料文献の整理をし、AACKの映像の歴史をまとめていよう。後始末はしなければならぬ。梅里雪山の遺体の収容がすむまで、何とかがんばらねばならない。（二〇〇一年九月七日受理）

### A3 二〇〇〇まできたAACK

高村 奉樹

新編集長北村タイシン（泰二）氏から、「きみは元会長でもありこれからの学士山岳会のことについて、なにがしかの提言をする責任がある。また山岳会の中心に座っていた者の一人とみなすので、この際、何か書かなくてはならない」という原稿依頼を受けた。つきつぎに来る注文付きの原稿督促で、遅筆がさらにひるんでしまう。日頃の雑事に追われて、この問題に集中することが出来ない。しかし、いいわけはよして、メモ風に書くことで責めを果たさせていただきます。

AACKニュース・レターをつくろうと平井（一正）、酒井（敏明）氏たちから相談を受けたのは、今西寿雄さんとお別れ会のあると、大阪駅近くでビールを飲みながらである。会員がそれぞれの活動、日常生活について情報を交換し、交流を深めるメディアとして、また山岳会の今後の課題を考える場になればということでもあった。

わたくしは第一号の巻頭言に次のように書いた。すなわち、個別の山岳会が、かつてのように意識共同体として活動できる範囲は限られてきているのではないか。その昔、桑原武夫氏がいみじくも予測したように、学術研究は多様な組織の統合によるプロジェクト推進の時代に入っている。わたくしは会の活性化のためには、単なる従来の同志的結合では限界が有るかもしれぬ。他の大学や組織から参加された会員と、新たな近代的で同志的な結合がうまれることに期待する、と述べておいた。

一方では、幾人かの会員から、クラブライフを築しめるような仕組みが必要だとの要望があった。学士山岳会は、いまさらいうまでもないが、目的は遠征隊を送り出すことだけではない、とも記しておいた。定款には「会員相互の連絡研修をはかり、もつて文化と学術の発展に寄与するとともに、自然尊重の精神を高めること」とある。「連絡研修」も活発になることを願つて、ニュース・レターを発刊したわけである。

（二）梅里雪山への再挑戦とその顛末について思うこと——会長の役割——

かつての歴史を振り返ると、そのときの主要な遠征隊を組織し、送り出す責任者が会長に任じられている。会長は会の全体の運営方針ではなく、当面の遠征について、隊の構成、組織に責任をもち、物資・資金の調達や内外の政治折衝に多くの協力者を糾合し、また自らがその推進にあたることを求められた。

こうした過程の蓄積によって山岳会の歴史はつくられてきたが、歴代の会長は、こうして作られてきた会の規範に照らして、さらにリーダーシップを発揮することを求められた。

規範のもつとも深いところにあるものは、初登頂であれ、未知の地域への踏査であれ、パイオニアワークに値するかどうかであった。それが折々に会の行動について検証し、推進するブイードバック機能をはたしてきた。

わたくしが会長をとにかく引き受けて、初めての理事会を開いたその日の夜に、規範の核ともいふべき今西錦司氏のお通夜が営まれ、理事会をはやめに切り上げた。ひとつの時代の終焉をおもわないではおれなかった。

さて梅里雪山の遭難後まだ日も浅く、主としてその事後の対応にあたっていただきたいと考えて、酒井（敏明）氏を、と同時に先述の巻頭言にはこのことは触れていないが、再度の挑戦へのひそかなおもしろい、木村（雅昭）氏に副会長をお願いした。しかし、ヒマラヤ委員会や事務局の諸氏の懸命なバックアップにもかかわらず、またメンバーがそれなりの知恵をしぼり、現場で努力したにもかかわらず、梅里雪山はふたたびたび撤退を余儀なくされた。

遠征すること自体についての検討は、さきに示したような山岳会としての相互理解に照らして十分に行われたか？私の、遠征隊についての期待は、隊員の経験に信頼することから始まっていた。しかし、さらに具体的な登

山行為についての準備はもとより、組織の行動のための共通認識の形成については、もっぱらヒマラヤ委員会に委ねていた。わたくしは、従来のリーダーシップからは一歩下がったところにおいて、有能にして、信頼できる委員会の諸氏に多くをお願いすることにした。このことの当否については議論いただきたいが、かつてのように会長が中心になってすべてを推進することは、時と場合によっては不可能である。

なお、この遠征については、中国との折衝に当たり、幾人かの会員諸兄から、既存の人的なチャンネルにのみ依存することの危険を忠告された。しかし従来との関係を去って、新たなチャンネルを拓くことは、事実として困難と、ただひたすら計画の実現を望むあまりに、かえって隊の若いメンバーに旧チャンネルの協力を得るため、無用の負担と時間の浪費を強いることになった。こういうときこそ、当事の会長としての適切な判断を示すべきであった。

## （二）探検の歴史を振り返る―平面的志向と垂直的志向

大航海時代から幾世紀を経て、地球上では平面的なひろがりへの挑戦と垂直的空間への挑戦が繰り返して試みられてきた。

その歴史的レビューは、私の力量を越えるので省略するが、A A C K に関していえば、先達が、ネパールではマナスル、カラコラムではバルトロ氷河に展開した調査、踏査行は平面的かつ垂直的で探検的要素を

多分に含んでいる。

その後のチヨゴリザ、ノシヤックそしてサルトロカンリなどは、学術登山を標榜してはいたが多分に登攀中心であった。ヤルンカンにおいて、垂直への志向は文字通り最高点に達して、八〇〇〇メートルが初めて学士山岳会のみ力で登頂された。

その後のチベットの山やまにおける活躍は、平面・垂直志向を複合した「コンロンに通える夢」の実現であった。平面と垂直を複合した立体的な構造は、そこにまた多くの学術研究の要素を秘めており、植物学、地質学さらには高所医学などの成果がもたらされた。

これらは、遠征登山の単なる副産物ではなく、初踏査、初登頂への意欲と分かち難い目的意識のもとに生み出されたものである。ここらあたりが本来の学士山岳会の行動規範を体現する遠征であった。

しかし、こうした内容をもつ行動は、当然いざれたねが尽きる。シシャパンマの六十才以上のわが会員たちの八〇〇〇メートル峰登山は、初登頂ではないが多くの高所医学的成果とともに評価されている。

未踏にして垂直的である梅里雪山は、わが京大学士山岳会、京都大学山岳部、探検部 O B を結集した最強のメンバーで構成されたチームを送り込んだにもかかわらず、雪崩のために敗退した。この時点で、わたくしたちは将来の発展につながるであろう活動家たちを大量にうしなってしまう。その後の二度目の試みも残念ながら不成功



におわっている。これは、聖なるやま、永遠に未踏峰として残すべきだという意見もあるが、地元住民の協力が得られるならば、志ある人によつて頂上への巡礼がなされてもよからう。ごく少数のメンバーによるソロ登山に近いものがぞましいと思う。

一方ブータン、パキスタン、また南米のインカのひとびとの住む地域での、医学学術、文化人類学的な研究調査などにも多くの会員が携わってきた。その成果はヒマラヤ学誌として京都大学ヒマラヤ研究会から毎年発刊されている。現在でも、小人数で高さを問わず、地図の空白地帯を見いだしそこを歩き登ることは十分可能であろうが、いまのところA A C Kが大挙して取り組むにふさわしい対象をわたしは思いつかない。いや大挙するのはもはや不要で、みつともないことであると思う。

このようにメモを書きながら、さて書くことを要請されたタイトルを思い出した。A A C Kよどこへ行く？である。会がまるで「闇夜の帆掛け船」みたいにきこえる。わたしにはやはり、A A C K可愛いやの気持ちがあつて、できれば「ようこそまできたなA A C K!」としたいような気持ちになる。

### (三) 知的探検の時代へ!

今西錦司、西堀栄三郎、桑原武夫氏たち以後の第二世代、川喜田二郎、梅棹忠夫、吉良龍夫、藤田和夫、故伊谷純一郎氏らの諸研究分での活躍と業績についてはいまさ

らいうまでもない。すでに現在までに、多くの第三世代が広範な分野で仕事をかさねてきている。いくつかの例を挙げると谷泰氏の牧畜文化と聖書世界についての文化人類学、木村雅昭氏の国家と文明システムの研究、田中二郎氏のカラハリにすむひとびとの生態人類学、中島道郎氏、松林公蔵氏らの高所医学研究、松沢哲郎氏のアイチヤンを介するヒトの研究、荻野和彦氏、岩坪五郎氏の森林生態学や物質循環、安成哲三氏のグローバルな気候学、北村泰一氏の地磁気学、本多勝一氏の自然と社会への探検と社会への警鐘。まだある。南極越冬隊を率いた横山宏太郎氏、水平的には南極大陸の奥深く入り、垂直的にはヤルンカン(八五〇五メートル)の初登頂を果たし、そして生還し、その上、氷河研究で一家をなした上田豊氏、一大学でシェルピカンリ、ついで諸種の意で困難なクラーカンリの初登頂をはたし、鋭く垂直を追及した平井一正氏など枚挙にいとまがない。これらの多くは、さらに次の世代に引き継がれて行く内容をもつた野外科学やバイオニア登山の成果であり、かれらが辿ってきた道はさらに後進たちによつて追従され、またあたらしい道へとつながるものである。ただ山登り、探検ということに限って言えば、空間的なひろがりには限度があつて、後進に奨めることに躊躇せざるを得ない。きびしいかもしれないが、今後どこに行くかは後進の力量にかかっている。

私は、昨年暮れに、京都の放送大学の面

接講義で、「探検・登山から野外科学へ」と題して話してみた。自然の理解を目的とする科目であるが、参加学生から、探検のゆくへについて問われた私は、二十一世紀はひとの心への深い探求、そして宇宙探検の時代でしようかと結んだことである。

(二〇〇一年十月二十四日受理)

## 未知の山を求めて

—二〇〇一年チベット東北部偵察行—

平井 一正

〔編註〕本文の地名はその地域の呼び名であり、一応カナをふつてあるが、それと必ずしも正しく表現されているとは限らない。カナの通り発音しても、はたしてその地域の人々が認識するかどうかは不明である。

### 一、はじめに

青蔵高原地図をみると川蔵公路(センゾウコウロ、成都からラサまで)北路のすぐ傍に布加崗日峰(ブーチャカンリ、六三二八メートル)という山がある。この山は多くの本にあつたが、全く何も書かれていない。中国登山協会の「中国登山指南」には名前がリストアップしてあるだけである。一九九九年秋に学習院大がこの付近を通り、望遠写真でこの山群を写した。これがこの山群が登山家の目にふれたはじめてのことであつた。この写真からは頂上はどこか

まだ不明である。

この山が街道から近いにもかかわらず、人目につかなかつたのは、この地域が長らく未開放地域であり、外国人にこの街道を通るのを制限していたことも、その原因のひとつであると考えられる。

私はこの山を偵察しようと思った。そして今回は単なるトレッキングであることも考えて、中国登山協会でなく、北京の職工旅行社に旅行の世話を頼んだ。そして二〇〇一年五月七日、関西空港をあとにする。同行は甲南大学OBの雨宮氏と米山氏の二名(共に六五歳、ちなみに私は六九歳)である。この日成都の九竜飯店に泊まる。

## 二、高度順応とラサで調整

今回は、ラサから次第に高度をあげてゆき低所におけることはないので、高度順応は慎重にしなければならなかった。成都是高度六百メートル、ラサは三七〇〇メートル、十五年前、クーラカンリ遠征のとき、私は頭痛、吐き気、食欲不振、脱力感などに悩まされたことがある。高山病は個人差があるので何とも言えないが、ここで体調をくずしたら後の行程がこたえる。心配していたら、高所医学の権威中島道郎博士が、ラサ空港に着いたその足でカンパラ峠(四七〇〇メートル)近くまであがり、それからおろりてきてラサで寝ればよい、と教えてくれた。

### ・五月八日(晴)ラサ

いつもラサに飛ぶ便は早朝である。六時

半発が一時間おくられて出発。エンジン四発のエアバスである。雲が低く何も見えない。やがて眼下にチベットの雪をかぶった無数の山々、茶色の大地がみえだし、九時半、機は陽光のラサ空港に着陸した。十五年ぶりの空港も全く変わった。レストラン、荷物受け渡しのベルトコンベヤーなど立派な空港施設に目をみはる。たしか以前はベルトコンベヤーもなく、建物も貧弱なものしかなかった。

ガイドのサムデユ(Sandup)と運転手がトヨタのランドクルーザーで出迎えてくれる。サムデユはチベット語はもちろん、中国語、英語、ヒンズー語がしゃべれる。元氣はつらつらの二五歳の若者である。我々とは英語でしゃべる。十時十分出発。

予定通りまずカンパラ峠に向かう。途中、四一〇〇メートル地点で二〇分ほど休憩する。十二時、峠につく。河口彗海が絶賛したヤムゾユムツオ、真っ白なノイチンカンサン、すべては昔と変わらないが、峠の上は人だかりで騒然としている。ヤクを着飾ってそれに観光客を乗せようとする客引きがうるさくつきまとい、峠の静寂さはみじみもない。

脈がはやい。早々におりる。曲水(チュースイ)でおそい昼食。ラサには十五時三十分到着。西藏賓館にとまる。樹木が生い茂り、建物が建ち並び、昔このあたりからみえたポタラ宮は見えない。

### ・五月九日(小雨のち晴)ラサ

朝すこし頭痛がしたが、高山病特有のだ

るさはない。あとの二人も同様である。小雨の降る中、ポタラ宮広場に行く。区画整理がすすみ、民家がとりこわされて商店街の建設がすすんでいる。ポタラ宮も重厚さがなくなったようだ。整備された広場で、チベット人が礼拝しているが、はげしい車の往来やコンクリート広場での礼拝はなんとなく似つかわしくない。チヨカン寺に行ったときもそれを感じた。バルコル商店街も変わった。今はダライラマの写真も発売禁止で、どこにも肖像画すらない。

小雨がふると意外に寒い。EPガスコンロをラサの運動具店で購入した。この店はポタラ宮広場に面しており、登山装備は何でもある。後日昆明でも同様な店をみたが、中国国内の登山熱は高まりつつあるようだ。

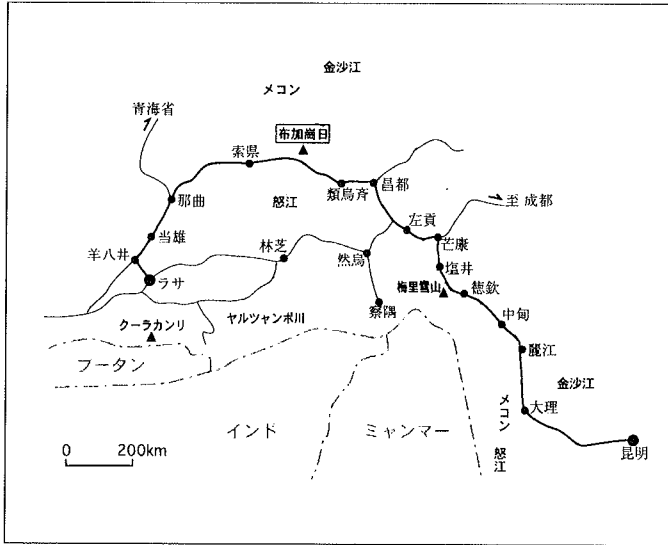
### ・五月十日(晴)ラサ

山はうつつらと雪をかぶっている。カンパラ効果か、全員高度の影響はない。高度順応はうまくいったようだ。街を歩くオレンジの僧衣をまとった坊主が平気で金をねだる。貧しそうな親子ずれもそうだが、だいたいそういう乞食はチベット人が多い。彼らの収入は漢族に比べてどうなっているのだろう。漢族とチベット族の関係をみてみると、戦前の日本と朝鮮の関係と比較してしまい、複雑な気持ちになる。

## 三、未知の山を探る

五月十一日(晴ときどき曇)ラサ↓当雄(ダンシュン) 走行11一六二キロメートル

朝六時に起床。サムデユがリュック姿で



現れた。しかしいくら待っても車が来ない。たまりかねて何度も電話した結果、予定していた車は整備不良で他の車にかえる、その車は現在空港に行っている、帰ってくるのを待つ、ということである。出鼻をくじかれ、不信感がつのる。

午後十三時やと車がきた。タイヤが少しましという感じで、外観は前の車と変わりばえしない。運転手は四四歳。彼は急に言われたので、着替えなどを取りに家まで回り道をする。きれいな奥さんが小さいボストンバックをもって出てきた。雲南までと彼はこともなげに言ったが、急に言われた方もびつくりしたことであろう。

舗装道路はラサからしばらく走ると無くなり、あとは砂塵もうもうの地道である。羊八井（ヤンパーチン）の手前で軍が道を舗装しており、トラックが列を作って通過許可のおりるのを待っている。三十分は待たされた。やがて道は北にまがり、念青唐古拉山脈（ニエンチンタングラ山脈）が望まれる。道も舗装され、やがて当雄（四三〇〇メートル）に着いた。午後十八時。まだ明るく山もきれいにみえている。念青唐古拉賓館の泊まる。三人部屋。すこし頭痛がするがたいしたことはない。部屋はテレビもあり、清潔だ。

・五月十二日（晴）当雄↓索県（ソーシエン） 走行II四二一キロメートル

快晴の朝。八時半出発。道路は舗装してあり、左手は美しい山並みが連なる。五体投地の巡礼、ヒッチハイクの男、ラサー北京のぼりをたてたバイクなど、ふるいもの、あたらしいものが混在している。那曲（ナーチュ）十一時。四五〇〇メートル。ここは大きい町だ。バスもタクシーもある。昼食はチベット風カレー。食堂の中はストープがもえている。寒い。車は電気配線の接続不良か、起動するときに一苦労する。ボンネットのしまりがわるいためにひもでくくつてあるのをほどこき、バッテリーをたく。かなりたたいた後、やつとセルモーターがかかる。

那曲発十二時二五分。町をでると舗装はない。がたがた道。多くの峠を越える。ジャラ峠四七〇〇メートルは大きい峠で、タ

ルチョが風ではためいていた。景色はすばらしい。ここをおりると怒江（ヌーチャン）源流に出る。支流をいくつこえたか。復曲（フチュウ）十三時。

布竜という部落から道は比如（ビールウ）に行く道とわかれるが、標識もない。まわりの山は赤茶けている。部落からすこしいったところで、左後輪がパンク。スペアタイヤは車の下にとりつけられていて、非常にはずしくい。サムデュは砂まみれになりながら格闘している。なんとか修復できず頃小雨がふりだし、やがて雪になる。山の斜面が雪で真っ白になる。道はかなり悪路で、飛び上がって頭をぶつけることも再々である。

怒江の源流が大きく合流するところで道は左に曲がる。日は落ちて、両側の谷がせまっている暗い山道をとばす。索県についたのは午後二十時十分であった。町の入り口の廉美鮮酒家（よみ方不明）というホテルにとまる。すぐに食事。サムデュはその前にパスポートを集めて公安に届けに行った。程なく帰ってきて、写真はとるなど警告。ここは外国人には未開放地域である。この日悪路の四二一キロメートルをよく走った。運転手はさすがに疲れたようだ。

・五月十三日（晴）索県↓ヤンガ 走行II 七九キロメートル

八時半起床。天気は快晴であるが寝不足で頭は重い。この宿舎がちょうど自動車修理もやっついて、パンクしたタイヤを修理

する。それは十時に完成したのだが、さらに右後輪のスプリング板が折れていることがわかった。修理屋の若者が、砂にまみれて車体にもぐりこみ、懸命にスプリングをはずす。

修理屋にはバイクにのった若者が頻繁に訪れる。一五〇CC、二五〇CC様々なバイク。一台六五〇〇元（二元十五円換算、約九七五〇〇円）くらいという。道中、どんなところでもバイクが走っていた。

十五時、ようやく修理が完成した。折れた部分を溶接して板をあてがっている。これは応急処置でいづれスプリング全体を替えないといけないという。修理代二六〇元（約二九〇〇円）を払って出発。十六時三十分丹青（タンチン）。大きなゴンパがある。ここから山にかかる。アンガラ四五〇〇メートルからはじめて布加崗日連峰を望遠する。学習院の写真はこの場所とつたに違いない。この峠をおりた中腹にヤンガという小さな部落がある。昔の地図では雅安（または雅安多）とかいてあるところ。ここに泊まる。十九時。チベット風スイトンを出してくれる。トイレは外だが案外こざつぱりして気持ちいい宿泊所だ。今日は七五キロメートルしか走っていない。

サムデュは布加崗日を知っているという村長と幹部を連れてきた。村長はソ連の二十万部分の一の地図でリーチェンドと書いてある部落を知っていた。古い名前なので、それがどこか、いままで誰にきいても知らなかった。氷河の末端には大きな湖があり、

行ったことがある、などと語った。

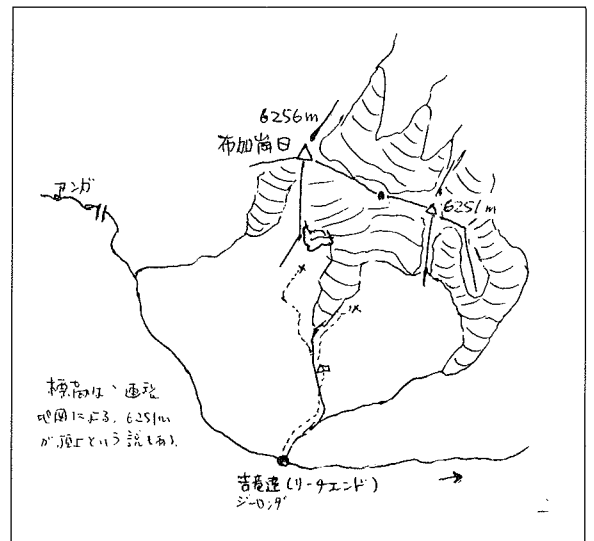
・五月十四日（晴）ヤンガーテント 走行II四四キロメートル

七時起床。朝は用意してきた和食。サムデュと運転手は昨夜のスイトンの残りを食べている。目的の山は近い。どの部落から山に入るか、サムデュは所々で車をとめては懸命に聞き出してくれる。チベット語をしゃべれないガイドだったらお手上げであろう。努力の結果、吉竜達（ジールンダ）という部落から入れば目的の山に行けるということがわかった。

村に入り、わだちのあとをついて車は谷の奥へ進む。やがて谷は大きく二分される。向かって左の谷の奥が我々の目的とした山である。小さい部落が谷の奥に有り、車はここまですである。川の横の草地にテントをはる。十一時十五分。

乾パンと野菜スープで昼食をすませ、荷物は車において偵察に行く。運転手が留守番。広い草原は一部湿地帯になっている。冬虫夏草（虫の幼虫に植物が寄生した葉草の一種）とりのチベット人の小屋がある。冬虫夏草は一キログラムあたり七〇〇元（約一〇五〇〇円）、バイク一台がかえる。いまチベット人はこの葉草とりに夢中である。近在のチベット人のみならず、ラサカからも来ている。

やがてアイスフォールが見え出す。一見してこれはむつかしいという印象をうけた。セラック帯をぬける登路はあると思うが、実際にいってみないとわからない。問題は頂上が



見通せないことである。氷河の横の岩が邪魔して左手にあるはずの頂上が見えない。アイスフォールの上は大きな雪段が何段にもなっている。そこに登路があるか、頂上稜線への取つきはどうか、これを知りたくてもう少し右の方が上がってみる。

十五時四十分、いくら上がっても頂上の肩くらいしかみえず、氷河の上の状況はわからない。ここで引き返す。テント着十八時。日が落ちると気温が下がる。夜中風雨が強くなり、雪に変わった。

・五月十五日（晴ときどき曇）テント↓巴達（バーダ）走行II四五キロメートル  
一面の銀世界になっている。サムデュは寒くて寝られなかったとこぼす。本日はア

イスフオールを通らずに山に向かつて左の  
コルから頂上へのルートをかざることにす  
る。元気のいいサムデュと米山氏が九時に  
先発する。アツという間に彼らは豆粒のよ  
うになる。三十分遅れて平井と兩宮氏が出  
発。太陽があがると雪は消えた。

天気はよく気持ちいい登りだ。四五〇〇メ  
ートルの峠に上がる手前にきれいな水のなが  
れている澤がある。ここで十二時。乾パンの  
昼食をとり、ここからゆつくり下りる。

十四時、上から下りてきた米山隊に追い  
つかれた。偵察の結果はあまり芳しくない。  
頂上は見えず、急な雪壁がたちはだかり、  
アイゼン、ピッケル、ザイルがないと登れ  
ない、見通しは暗いという。テント着十五  
時。相談の結果、明日雪が降ったら下山が  
困難になるということから、すぐテントを  
たたみ、下山することにした。偵察もでき  
ることはすべて終わったし、結局ルートは  
見つからなかつた。頂上の写真もとれなかつ  
た。実り少ない偵察結果であつたが、こ  
れ以上どうすることもできない。未知の世  
界を明らかにするときには、いろいろな障害  
があるものだ。天気も悪くなりつつある。

十五時四十分出発。吉竜達村をすぎて街  
道にもどり、巴達の招待所着十八時。窓ガ  
ラスのこわれたカビくさい五人部屋が今夜  
の宿である。

布加崗日の登頂ルートを探れなかつたが、  
全く手つかずの山という魅力は大きい。高  
さが六三〇〇メートルそこそこなので、強  
力な隊であればいきなり行つても登頂の可

能性があるが、まだ未開放地域なので登山  
許可をとるにはかなりむづかしいと思われ  
る。私には残念ながら再度挑戦する時間が  
残されていない。

#### 四、メコンの源流を走る

・五月十六日(曇) 巴達↓類鳥斉(レイウ  
ーチー) 二八二キロメートル

夕べはよく寝られなかつた。オジャで朝  
食。八時半、感じのわるいこの招待所をあ  
とにする。セラ峠四八〇メートルからの  
眺めは抜群である。薬草とりのチベット人  
のテントが点々とみえる。雲が低く遠くの  
山は見えない。周りの山は雪をかぶつて真  
白である。丁青(ティンチェン)着十二  
時半。大きな町だ。ハイヒールや厚底のブ  
ーツをはいた女の子が歩く。うどんと水餃  
子の昼食。ここでちようど車がパンクした。  
昼食の間に修理。修理代二五元(約三七五  
円)。十三時四五分発。丁青の町はずれで給  
油。一時間走つたところで同じタイヤが再  
びパンク。サムデュが懸命にスペアタイア  
をはずす努力をするが、はずれない。通り  
がかりの車の助けをかりた。この修理に四  
十分かかつた。

四八〇〇メートルのジロ峠を越える。タ  
ルチヨがはためく。ここを下りると自然の  
様相は一変する。大きなスギヤトウヒが道  
路の両側に生えている。メコンの源流の河  
原は上高地のようだ。空気はおいしく、生  
き返る。チベットでは木材は村の貴重な財  
源である。類鳥斉に入る手前から道は舗装

されている。

類鳥斉の郵電局招待所についたのは午後  
二十時。この部屋は二階でトイレは下で  
不便だが、部屋は清潔で申し分ない。部屋  
代が昨夜の招待所と同じ四十元(約六百円)  
で、あらためて昨夜の部屋の高いことを思  
い知らされた。

・五月十七日(曇のち雨) 類鳥斉↓昌都  
(チャンドウ) 一一二キロメートル

夕べは、タイヤ修理に三十元(約四五〇  
円)とられたと運転手がなげく。八時出発。  
途中珠角拉山(チウチャオラシャン、四六  
八メートル)を越える。ここからは道は  
どんどんさがり、気温もあがつてきた。大  
きな木が多い。道が舗装されたところから  
昌都まではバスも走り、完全舗装である。  
日もさしてきた。昌都着十三時。昌都飯店  
という立派なホテル。外国人はこししか泊  
まることは出来ない。久しぶりのシャワー。  
夕方から雨。

・五月十八日(雨) 昌都

雪が三八〇〇メートルまで下がつて、付  
近の山は真っ白である。十時、チャンパリ  
ンゴンパを見学。午後は休息。新しいスプ  
リングに付け替えて修理完了。気温が下が  
り寒い。

・五月十九日(雨のち曇) 昌都↓左貢(ツ  
オコン) 二八二キロメートル

邦達(パムダ) 飛行場までは道路は舗装  
されている。小雨が雪に変わる。浪拉山  
(ランラ山、四五七二メートル)も白一色で  
何も見えない。四二〇〇メートルの飛行場

には機影が見えない。世界で最高所の飛行場である。雨の中を邦達につく。ここは川藏南路との合流点。ここから左貢までは前に走ったことがあるが、記憶にない風景が展開する。玉曲（イーチュウ）沿いの道は途中から舗装してあり、快適である。十五時左貢。二八二キロメートル。郵電招待所に泊まる。十五年前と様相は一変している。漢民族の店が多い。政府命令でこの発電所で働くラサからきた若い娘さんの話をきく。命令を拒否できないそうだ。文革時代の下放が今も生きている。サムデュは我々にチベットのおかれている現状を訴える。

・五月二十日（曇のち晴）左貢↓塩井（イエンチン）二七二キロメートル

雪でおおわれた東達拉（トンダラ、五〇〇メートル）をこえる。チエンがほしくらいだ。メコンの支流をどんどん下がり、やがて断崖に沿って登りだし、ひとつ峠を越してメコンにでる。このあたりでやつと昔の記憶に結びつく。メコンをわたり、アルプ状の気持ちいいところをのぼり、拉烏山（ラーウ山、四三〇〇メートル）をこえて芒康（マンカン）にでる。十三時。ここは川藏公路の交通の要衝であり、人が多いが、まちは汚い。昼食ののち一気に塩井まで。紅拉山（ホンラ山、四三〇〇メートル）の峠をこえるともう夏のような日差し。メコンを眼下に車は下がる。塩井十七時。

## 五. 雲南省に入る

・五月二十一日（晴）塩井↓徳欽（デーチ

ン）一一八キロメートル

昨夜雨が降ったが、朝は晴れていた。途中崖崩れで三十分くらい待機。梅里雪山は雲の中で、頂上がかすかに見え、あらためてこの山の大きさを感じた。明永氷河がよく見えて、遺体搜索の苦勞が偲ばれた。峠の飛来寺で十年前に遭難した十七人の冥福を祈る。今回の目的のひとつを無事に果たせて、気持ち落ち着いた。碑はきれいに整備されていた。銘板の「大地あり、美しき峰ありて、気高き人がいて」は胸をうつ。徳欽着十二時。達聖酒店というホテルに泊まる。

・五月二十二日（曇）徳欽↓中旬一八三キロメートル中旬には飛行場もあり、観光客も見られる。

・五月二十三日（晴）中旬↓麗江二〇四キロメートル

・五月二十四日（晴）麗江↓大理二〇二キロメートル

・五月二十五日（晴）大理↓昆明三六二キロメートル 昆明三時。ラサからの走行距離は合計二八〇〇キロメートルであった。

・五月二十六日（雨）昆明滞在、石林など見学

・五月二十七日（晴）昆明発十四時四十分のJASで帰国。

## 付録一 学術調査結果

東チベットは比較的开发がおくれている地方であるが、それでも漢族の進出で、町は大きく変貌している。特に昌都は空港も

できて開発がすすんでいる。昌都はメコン川の源流にあり、メコン川の汚染が予想される。私は十五年前の一九八六年にクーラカンリ登山のあと、川藏公路をラサから成都まで走破した。そのときメコン川の水を採取し、そのまま保存していた。今回ほとんど同じ場所、同じ月日にメコン川の水を採取してその比較を行った。これが表一に示すものである。予想通り窒素酸化物の増加が著しいことが判明した。

（水質検査は富山県立大学短期大学環境工学科吉岡龍馬教授にご協力賜った。記して感謝する）

## 付録二 布加崗日峰の頂上について

今回の偵察では頂上の位置を確かめることが出来なかった。これは地形的な関係もあるが、唯一アンガラ峠からの望遠写真しかこの山塊を展望できるものがないという資料不足もある。頂上の高さは中国登山協会発行の「中国登山指南」および青藏高原地図には六三二八メートルとあるが、旧ソ連の二十万分の一では六二五八メートル、五十万分の一では六二五一メートルとあり、その位置も地形も違う。実は五十万分の一地図は帰国後中村保さんに頂いたのであるが、地形的にみるとこれが一番アンガラからの写真にあう。二十万分の一の地図ではどうもアンガラからの写真に合わないのでも悩んでいた（中国登山協会関係の資料では地図がない）。

本文で示した地図は二十万分の一の地図

	採水日	伝導度 ( $\mu S/cm$ )	HCO3- (mg/l)	SO42- (mg/l)	Cl- (mg/l)	NO3- (mg/l)	F- (mg/l)	Br- (mg/l)	Na+ (mg/l)	K+ (mg/l)	Mg2+ (mg/l)	Ca2+ (mg/l)
メコン川	2001.5.20	483	171.2	78.8	34.6	3.25	0.31	ND	22.4	2.06	14.2	58.3
メコン川	1986.5.19	435	165.3	60.0	27.9	0.73	0.19	0.29	21.0	1.89	11.7	57.3

富山県立大学短期大学環境工学科吉岡龍馬教授のご協力による。

からスケッチしたものであるが、五十万分の一度は、頂上？はこれよりさらに東のピーク（△で示した所）である。頂上の位置を断定するにはさらに資料が必要である。

(二〇〇一年十月二十日)

受理)

## 登山と探検に関する図書の紹介

松林 公蔵

「登山の医学ハンドブック」  
（日本登山医学研究会  
編、杏林書院、二、三  
五〇円）

登山の医学については、京大山岳部の現役時代にもさまざまなかたちでレクチャーがもたれ、またヒマラヤ高所登山の検討会でもタクトテクスが論じられる際にはいつも高度障害が問題となるので、山の医学については多くの会員がほぼ共通の知識を共有しておられることと思う。また、AACKには、林（一彦）氏、

中島（道郎）氏、齋藤（惇生）氏などの先輩医師会員がおられて、高所医学研究でもAACKは日本の最先端をはしっている。とりわけ、中島氏は約二十年前に、日本登山医学研究会を創設され、現在では全国で約三百人程の会員がいる。登山医学研究会会員は、山好きの医師が主体であるが、登山家で医学に興味をもっている人びとも多く入会しており、毎年一回もちまわりで全国レベルの研究会を開催している。京都では、過去に、中島氏、齋藤氏がそれぞれ会長として、二回のシンポジウムがもたれた。

この日本登山医学研究会で、一般登山者むけに山の医学に関する実用書を執筆しようという話が一年もちあがり、私とその編集責任者として本書を製作した。これまでも、山の医学に関しては、J.A. Wilkersonの名著「Medicine for Mountaineering」（邦訳「登山の医学」東大スキー山岳部医学部OB訳）があるが、やや学術的すぎて実用書ではなかった。また、ポケット実用書としては、中島氏が執筆された「山での病気とけが—予防と応急手当の知識（一九八六年、山洋社）」があるが、紙数の関係で限られた内容にとどまっていた。そう言う意味では、本書が日本での登山医学に関する最新の実用書となるわけだ。

本書は、日本登山医学研究会所属の医師たちに、各人の専門の分野をそれぞれ担当してもらい、登山と医学に関する比較的広範な問題をできるだけコンパクトに分担執筆していただき私が編集した。編集した側

から言うと、まだ文章が硬かったり、やや教科書的で、また文体の不統一などまだまだ改善すべき点が多々めだが、サーキュレーションについてはいえば、高校山岳部の顧問の先生や大学山岳部のリーダーたちによく読まれているようで、比較的好評なようである。登山者がリュックにいれて登山にでかけ、何かの症状に遭遇したときにひもどくことができる程度のポリウムであることもよかつたのか、日本登山医学研究会が買い取った五百冊はすでに完売した。興味のある会員の方々に一読いただければ幸いである。

### 追記

なお、本書とは直接関係ないが、平成十四年五月十八日（土）から十九日（日）に、私が会長として第二十二回日本登山医学シンポジウムが京大会館で開催される。「登山にまつわる科学—京都フィールド学への招待—」と題して、教育シンポジウムを企画している。上田（豊）氏に氷河の話、安成（哲三）氏に気象学のレクチャーをお願いし、すでに内諾をいただいている。京都での開催でするので、AACK会員のかたがたのご来会をお待ちする。

(二〇〇一年十月一日受理)

## 「映像史 ヒマラヤへの道」製作に当たって

平井 一正

今年二〇〇一年はAACK創設七十年に

当たります。その記念行事として、A A C Kの登山と探検の映像のビデオ化ということが、昨年の総会で可決され、提案者の私がプロジェクト委員長になって事業をすすめてきました。このたび関係者のご協力で映像史が完成し、ここに会員の皆様にお届けできるようにになりましたことは喜びにたえません。

次に責任者として、事業のあらましを報告いたします。

### 一・製作の動機

制作の動機は、いま映像をなんらかの形で保存しておかないと、貴重な映像が四散するおそれがあるという危機感であります。関係者が他界されると、貴重な資料が失われることは珍しくありません。現に今西寿雄さんが亡くなられたために、一九五三年のアンナプルナの映画フィルムが行方不明になっていきます。また一九三四年の白頭山遠征のフィルムを全国かなり広範囲まで探しましたが、結局行方不明のままです。いま現存するフィルムの所在を調査し、まとめておくことは焦眉の急であるという危機感がありました。

今回幸いにして関係者の努力によってかなりのフィルムの所在が明らかになりました。とくに吉良竜夫先生のおかげで、一九四一年のポナベ島調査のフィルムが発見されたことはうれしい限りです。

### 二・コンセプト

映像をまとめるに当たって、単にA A C Kの歴史としての内部資料にするのか、日本の登山探検史としても鑑賞に値するようになるのか、そのコンセプトは何か、が問題になりました。これに対しては単に歴史を映像化した紙芝居的なものでなく、日本の登山探検史としても鑑賞に値するようなものを作る。そのコンセプトは学者集団としての登山グループのパイオニアワーク。また懐古するだけでなく、将来に希望をもたせるようなもの、若い人がこれを見て勇気と希望が出るような内容にしたい、後世の若者に伝えるインフォメーションを含んでいるようなものとしたという方針で進めました。

なおV H SにするのかD V Dにするのかの問題もありましたが、一般の普及率を考へてV H Sとする、ただ将来にそなえてD V D版を二本製作しておく、としました。

### 三・費用

最大の問題は費用でした。チャチなものを作るなら作らない方がいいという意見もありました。幸い昨年コンロン遠征にも参加した河端繁さん(京一中OB)と知り合い、いろいろと相談ののつていただいた結果、かなり安く製作できるように考えてくださいました。また映像によって著作権代の問題がありますが、本ビデオが学術目的で販売はしないということで、関係各社すべて著作権代は無料ということとしていただきました。

### 四 問題点

このビデオは登山と探検の映像を中心としていますので、ひとつの隊が日本を出るまでの苦心や、A A C Kの運営、再建などに当たったの苦労話、三高山岳部が京大山岳部に移行するときの内情には一切ふれていません。そのためA A C Kや山岳部の発展に貢献された工楽英司、鈴木信、林一彦、藤村良、山口克氏などの諸先輩の話はできません。表面的なきれいな話だけで自己満足に過ぎない、という手厳しい意見もありますが、すべてを盛り込むには少々無理がありました。ご了承ください。

またこのシナリオは今西錦司編「ヒマラヤへの道」(中央公論社)に基づいています。このため、一部事実誤認があると指摘をうけました。たとえばビデオでは、一九五一年伊藤洋平さんが今西錦司研究室を訪れ「そろそろ鳥かごをでませんか」と言い、今西さんはその場で腹をきめ、「よし、ネパールや」と言ったとありますが、これは事実誤認です。事実は今西さんは伊藤さんに「中尾と相談してこい」と言ったそうです。これは編集責任の私の不勉強のいたすところで、まことに申し訳ありません。他にも誤りがあると思いますが、何とぞお許し下さい。

### 五 種々な意見

本ビデオ作成の当初、関係者に集まってもらって意見をききました。  
・記録を保存するだけならビデオにおとし



て整理しておくだけでいいのではないか

・ ホームページで関係語句をクリックして動画ができるようにしたらどうか

・ 写真入りの冊子を編集発行して記録を残したらどうか

・ A A C K 保存のフィルム、ビデオを京大博物館に寄贈して、誰でもアクセスできるようにする

以上のような意見がありましたので、将来の参考までに紹介しておきます。

## 六 謝辞

潮田三代治さん（チヨゴリザのカメラマン）および辻一郎さん（毎日EVR）には企画の当初からいろいろと相談にのっていただき、また版權の件では献身的なご協力をいただきました。河端繁さん（日本シネセル）および松本正樹さん（同社フリー専属、京大探険部OB）には企画、製作、進行などすべての面でご協力いただきました。今西武奈太郎さんには写真の提供でご協力いただきました。その他いちいちお名前はあげませんが、多くの個人、法人、さらに会員の皆様にはいろいろとお世話になりました。以上の方々ここに厚くお礼申し上げます。

お願い…ビデオをご覧いただいた感想、コメント、さらに戦前の映像フィルムの情報などがありましたら、平井一正までご連絡ください。住所などは名簿にあります。メールはkhirai@mbx.kyoto-inet.or.jpです。よろしくお願ひ申し上げます。

（二〇〇一年十月二十三日受理）

## 一澤オヤジさんの想い出

北村 泰一

A A C K ニュース・レターの二十号に平井一正氏の『一澤信夫さんを悼む』という文が載った。私は一澤さんが亡くなったことを知った。一澤さんとは、あの『一澤のオヤジさん』のことであろう。私は『信夫』というお名前をはじめ知った。遅まきながら、御冥福をお祈りしたい。

それは一九五六年の八月頃だった。その頃、私は東京にいた。京都を家出同然に出て（A A C K ニュース・レター二十号『南極を夢見た頃』の最期の部分参照）、東京で、今いうところのボランティアで南極の準備を手伝っていた。私は西堀さんを手伝っていた積りだったが、西堀さんは、なにかというと『京都へ帰れ、帰れ！』と私に言った。

西堀さんにそう言われるのは辛かった。西堀さんしか頼る人がないのに、その西堀さんから『帰れ』と言われるのは、辛い以上に情けなかった。

その頃、南極関係者間には微妙な空気があった。副隊長と決まっていた西堀さんといえども、南極の主流から外されそうな空気があった。西堀さんは、人々より一歩も二歩も先じた意見を言うものだから、それを理解出来ない人々からは煙たがられていた。

西堀さんは、そうした反対派の人々にスキを与えたくなかったのであろうか。西堀

さんが、身内（A A C K）の人間（始めは三〜四人いたが、その時は私ひとり）を特別扱いしている人々に見られないように、絶えず気を配っていたようである。私は耳にタコが出来るほど、『目立つな。京都へ帰れ！』といわれた。

一九五六年八月といえば、南極へ出発する（十一月八日）三ヶ月前であったが、最初の時だとして、そんな切羽つまって、まだ隊員すら公表されなかった。でも、三ヶ月前といえ、いくら何でもそろそろ隊員が決まらねばならない時であった（二ヶ月まえの九月に隊員が決まった）。

私はかねて理髪師の免許取得を宣言していた。八月にはその免許を実際にとろうと京都へ帰っていた。

西堀さんの個性かもしれないが、隊員（設営隊）採用の基準は、どれだけの能力や資格があるか、であった。だから、私は隊員に採用されることに有利なように、理髪師の免許をとろうと思いついた。

京大の吉田神社横の理髪店『日進』に事情を話して小僧に雇って貰った。山岳部やスキー部の友人が『痛い！痛い！』と叫びながら、試験台になつてくれた。

西堀さんのもう一つの採用基準は、その人物がかつて死ぬ経験をしたこと、あるいは、死にそうで死なない人物、というものがだった。それで、特攻隊の生き残り（二人）とか、終戦時に満州を彷徨した人間（二人）とか、学生時代に山岳部で冬山経験者とかが選ばれた（六人）。

私には火薬の免許がある。理髪の免許もある。犬そりもある（実際に免許証というものはなかったが）。そして、山岳部では、死ぬ目には幾たびか遭った。オーロラ観測も出来るぞ。

それでも私は不安であった。観測隊そのものには入れそう。それは西堀さんが、口では『帰れ、帰れ！』と言っている、ハラの中ではどうも自分を入れてくれそう。それは西堀さんの顔を見ればわかる。だから、観測隊として南極までは行けそうだが、しかし越冬隊に入れるかどうかは自信がなかった。越冬をしなければ、大学を蹴って東京へ出てきた甲斐がないではないか。

西堀さんが関係するまで、南極計画原案は、最初（第一次）は船は南極へゆくが、夏の間だけ現地にとどまってそのまま帰る、というものであった。それを、第一次の越冬なくして、なんの第二次の本観測越冬か。第一次の越冬がないなら、本観測の越冬は成功しない、と断言して、無理に第一次の越冬を計画にもり込ませたのは西堀さんであった。学術会議のオエライ先生方とか、政府の役人たちは、それが理解できない。

当時、何もわからない南極へゆき、最初から越冬など、自殺しに行くのと等しいと反対論が多かったという。西堀さんが説得につとめた結果、やっと、越冬は前もって決めず、現地状況を見て永田隊長が判断するということになった。そんな訳だから、まして越冬隊員は決まらず、現地で、最期

に決まるといふものだった。

その頃、私は、すっかり『南極』に舞いあがっていた。もし、最期に越冬隊に入れなかったらどうしよう？南極を眺めただけで、おとなしく帰ってくるか？いやいや、なんでそんなオメオメと手ぶらで帰って来ることなどが出来ようか。悩む日々が続いた。『必ず』越冬隊員に選ばれる方法はないか。何か方法はないか、と毎日毎日思い悩んだ。

ある時、ハッと気がついた。これしかない。百パーセント越冬できる方法はこれしかない。しかしそれは両刃の剣。自分の越冬が成功したら、それは、同時に、自分が社会から抹殺されることを意味していた。社会とは『学問社会』である。

『自分はこれで学問社会から追放された、オサラバだ』という思いは今までもあった。主任教授の長谷川万吉京大教授から、『南極へ行くなら、お前は破門だ』と言われた時、これで学問社会とはお別れだと覚悟した（二十号参照）。

しかし、まだその時は、自分がもし、南極で科学的な手柄を立てたら、ひよつとしたら、長谷川先生は許してくれるのではないだろうか、などと淡い希望を持っていた（実際には、帰国したら、勘当はすでに解かれています。大学院博士課程に入れておいてください。ニュース・レター二十号参照）。しかし、今回はそうはゆかない。今度こそ追放だ。だが、それでも仕方がない。

その方法とは、脱走・脱走・脱走だ。

越冬隊でもないのに、船から逃げたら皆は困るだろう。永田隊長は責任を問われるだろう。永田隊長は東大教授で、私の専門分野（地球物理）の学会のボスだ。烈火の如くに怒って、以後私は地球物理分野には顔だしは出来なくなるだろう。

隊員は皆公務員の身分にされた。だから、自分も隊員になったら公務員だ。脱走は明らかに公務員としてのルール違反だ。そうすると、公務員としても社会から抹殺されるかも知れない。でも仕方がない。私は思いつめていた。

船から脱走することは簡単であった。食料とシュラフは船から頂戴して、あとはスヴェア（当時の山用携帯石油コンロ）とツェルトだ。これは個人用を準備した。万のこのことを考えて、カツオブシを一本、非常食として荷物の中に忍ばせた。これだけあれば、一週間や十日くらいは生き延びられる。

人間が一人くらい船からいなくなっても、人々は何日間かは捜すだろうが、どこか遠い岩陰に潜んでおれば、盗んだ食料と、スヴェアとツェルトで一週間や十日くらいの生活は簡単だ。視界は、晴れておれば三十キロ〜四十キロは可能である。それだけ離れたらよもや見つかるまい。こちらからは船が良く見えだろう。船が諦めて出ていいたら、しばらくして基地の扉を叩く。よもや、西堀さんから『帰れ！』とは云われな

いだろう。こう考えて、脱走用のキスリングを作る

ために、一澤オヤジを訪ねた。値段は二千円か三千円位であった。しかし、金はなかった。当時としては、それは大金であった。

私は、この計画を誰にも打ち明けなかった。西堀さんにも、勿論打ち明けなかった。計画を、自分一人の胸に収めておくことは苦しかった。実際には、誰かに打ち明けて自分の気持ちを軽くしたかった。しかし、誰かに相談したらその人はきつと困るだろう。万一、その人が計画の中止を自分に忠告したらどうするか？自分はその人を信頼するから打ち明けるのではあるが、忠告をきいて、その計画を止める気持ちはない。ならば、人に相談せずに自分ひとりでその責任を負えばいい。とはいうものの、やはり苦しかった。

さあどうしよう。

一澤のオヤジといえども、理由を話さなければキスリング代を一年間も待つてはくれまい。

しばらく悩んでいたが、こうなったら仕方がない。決心してオヤジに秘密をうちあけた。脱走が成功して無事に帰国したら払うから、と。

オヤジは黙って聴いていた。しばらく沈黙が流れた。自分はハラハラしていた。

黙っていたオヤジはポツリとこういった。  
『北村さん。キスリングの代金は帰国してからでよろしい。無事に帰国してください。』

私は胸をなでおろした。そして尋ねた。  
『しかし帰れなかったらどうしよう？』

『その時は、北村さん、あなたの香典にしておきましょう』

こうして、脱走の準備は整った。

それから半年後、幸い、越冬隊員の最期の十一人目に入れた。準備した品々は無駄になった。

こんなのを、『幸か不幸か』というのである。

帰国してすぐに代金を払ったのは勿論である。オヤジは無事の帰国を喜んでくれた。

ツエルトは五、六年前（一九九四年）に中国のココシリ地区へ行つたときに現地に残してきたが、オヤジのつくつてくれたキスリングは今なお手許にある。

その時から四十三年も経つた。西堀さんも逝つたし、一澤信夫さんも逝つた。越冬の仲間六人も逝つた。さみしい……

オヤジさんよ。あの時は本当にありがとう。今頃だが、心からお礼を申し上げる。そして、つつしんで御冥福をお祈りする。

（昭二十九年理卒。日本南極観測隊 第一次、第三次越冬隊、タロジロ発見者、犬係り、オーロラ係り。九州大学名誉教授）

〔追い書き〕

この話は、コトがコトだけに今まで外部に話したことはない。

今から、二十一年弱前に出版した拙著の『第一次越冬隊とカラフト犬』（教育社、昭和五七年発行）の中に、この脱走計画はぼんやりと書いてあるが、気がついた人は多くはない筈である。

あれから半世紀弱も経つた。もうよいだろうと考え、また、一澤信夫さんに、当時の感謝を述べたい気持ちもあつてここに書いた。それに、自分もいつあの世へ旅だつかもしれないので。

## 会員動向

## 訃報

福渡七郎（農化S五卒）

逝去日 平成十三年六月七日  
つつしんでご冥福をお祈りいたします。

# グリーンランド、オーロラと本場犬そりの旅

北村 泰一

・朝日旅行センター主催（福岡）（京都支店では不明かもわかりません）

・北村泰一

・二〇〇二年三月十七日 出発。八日間

・第一日 福岡（閑空）↓成田↓コペンハーゲン（泊、SAS）

・第二日 コペンハーゲン↓カンゲル・ルスアーク（SAS、グリーンランド南端）↓イルリサット（グリーンランドのエスキモー寒村泊）。

・オプシオンⅡ到着後、観光用でない犬そりにて森や大陸走行（二時間、有料）。夜はオーロラ観賞。オーロラセミナー。

・第三日 終日イルリサットにて自由行動。

・オプシオンⅡ氷海クルーズ（六時間、有料）イルリサット泊

・第四日 空路カンゲル・ルススアークへ。午後自由行動。

・オプシオンⅡフォトサファリⅡ麝香牛やトナカイを探す（一時間半、有料）カンゲル・ルススアーク泊。

・第五日 終日カンゲル・ルススアークにて自由行動。

・オプシオンⅢ氷河の源、内陸氷冠見学（車三時間、有料）

・第六日 空路コペンハーゲンへ。午後自

由行動。コペンハーゲン泊。

・第七日 空路帰国。機中泊。

・第八日 成田着（十時三十分）。リムジンにて羽田へ。午後福岡。

・全行程 ￥四六八〇〇〇／人（成田・閑空はその分安くなります）。

・夜のオーロラ観賞のための防寒着は無料賃貸、日本国内の空港までの荷物配送は無料。

・昼はフィヨルドと懸崖氷河の壮絶さを、夜はオーロラの神秘を。

・最新のパンフレットと今後の情報・パンフレット請求は、

電話＝092-474-7556、ファクス＝092-452-0171、メール＝tabi@ahs-gr.co.jp

・朝日旅行センター、祝部（ホウリ）他。決心はもつとあとでよい。パンフレット請求自由。

## 編集後記

編集子（北村）は、全く最近のAACKの事情を知らない。三十年まえに京都を離れて福岡に移ったからだ。だから、特集テーマ、『AACKのこれから歩む道』なんて、まるで『的はずれ』かも知れないと恐れた。学生の頃（五十年前）、『低くてもよい。高峰の第二登者たるより、足跡のない峰の第一登者であれ・・・』という登山哲学を教わった。それに酔った。京大山岳部に飢狼達が集まってきた。

当時は、ヒマラヤに未踏峰はどこにでもあった。信じた哲学を実践することになかなかなかった。未踏峰を登ること自身（技術的）にも困難はあったが、隊を送りだす困難（総合的）も大きかった。成功した時、全員『昇天経験』（四頁、川瀬氏のA1参照）を味わった。

ケネディが『月へ行こう』と言いだした時（一九六一）の演説を思い出す。『We go to the moon. We go to the moon. We go to the moon in this decade, because it is not easy but very hard!』

『初登頂主義』がゆき詰まって久しい今、この特集を通じてAACKに新たな『夢』が生まれたらこんなうれいことはない。シニアもジュニアも、この困難なテーマに取り組もう。諸氏の投稿をお待ちする。

北村 泰一

編集委員 北村泰一、上田 豊、松林公蔵

発行日 二〇〇一年十一月二〇日

発行所 京都大学学土山岳会

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓二郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一一八

(株)土倉事務所